

日本語と英語の感情・感覚表現

——事態把握・人称制限——

井 原 奉 明

The Expressions of Feeling and Sensation in Japanese and English:
Construal and the Restriction of the Use of Pronouns

Tomoaki Ihara

Abstract

This article is a study about how Japanese and English speakers construe and linguistically encode the situations, especially focusing on the expressions of feeling and sensation. Japanese speakers tend to prefer subjective construal, while English speakers like objective construal. The author tries to explain the zero restriction of the use of pronouns in English with the contrast of Japanese, not from the behavioristic standpoint but from the standpoint of 'the impersonality of viewpoint and perspective.'

本稿は、認知言語学における事態把握についての考え方を基に、日本語と英語の感情・感覚表現を考察する研究である。日本語話者は「主観的把握」を好み、英語話者は「客観的把握」を好む傾向がある。日本語に人称制限があり、英語にないという相違について、行動主義的な観点からでなく＜視座と眺めの非人称性＞という観点から説明する。

1. 事態把握と言語化

本稿の考察に先立って、事態把握について、および事態把握に関する対比的なふたつのスタンスについて説明する。

話者は、ことばを発する時、ある特定の状況下において発話する。その際、言語化に先立ち認知主体としてその状況の「こと」に注目するか「もの」に注目するか、何に焦点を当て何を背景にするか（何に焦点を当てて「図」とし何を「地」とするか）、注目した「こと」や「もの」をどのようなスタンスで認知するか、そして何を言語化して何を言語化しないか、どのような構文・表現を使って言語化するかを選択・決断する。発話に先立つこのような認知的営みを「事態把握」と呼ぶ。¹

池上は「事態把握」を以下のように説明している。

...before uttering a sentence, i.e. before acting as a locutionary subject, the speaker is presumed to undergo a cognitive process of how to make sense of the situation she is going to encode linguistically. In other words, the speaker has to act as a cognizing subject before acting as a locutionary subject. The speaker has to decide, for example, which part or parts of the situation she chooses to encode and which part or parts of the situation she leaves unencoded and then, from what perspective she is going to encode what she chooses to encode. (Ikegami 2015: 2)

(論文執筆者訳: 文を発話する前に、すなわちことばを使う主体として振舞う前に、話者は自らが言語的にコード化しようとする状況をいかに意味づけるかに関する認知的過程を経ると仮定される。言い換えれば、話者は、ことばを使う主体として振舞う前に認知主体として振舞わねばならないのである。たとえば、話者は、状況の中でどの部分を言語化するか、そしてどの部分を言語化しないかを決め、言語化しようとするものをどの視座から言語化するかも決める。)

The speaker (as a cognizing subject) is supposed to make her decisions on her own, assessing which possible choice will be most relevant to the communicative intentions she has in mind. This cognitive process is called 'construal' in cognitive linguistics. (Ikegami 2015: 2)

(論文執筆者訳: (認知主体としての) 話者は、自分が心に持つ、聞き手に伝えたい自らの意図に最も関連深い選択肢がどれであるのかを評価し、自らの創意で選んで決定することになっている。このような認知過程は認知言語学において「事態把握」と呼ばれている。)

「事態把握」には対比的なふたつのスタンスがあることが知られている。池上は、ひとつを「主観的事態把握」、もうひとつを「客観的事態把握」と呼んでおり、中村は、それぞれをIモード、Dモードと呼んでいる。² 本稿では「主観的把握」、「客観的把握」という用語を用いる。

次に「主観的把握」と「客観的把握」のそれぞれについて説明する。最初に「主観的把握」を取り上げる。「主観的把握」とは、「<話者>自らが<事態>に直接参与しているというスタンス」(池上 2011: 51) で把握する方法である。認知主体は「今・ここ」の状況にあって状況の「内」に身を置き、臨場的・当事者的・体験的に事態把握する。そして、話者として知覚・認知したもの、自らの<見え>に入る「こと」や「もの」に焦点を当てて言語化する。焦点が当てられずに背景に退いた「こと」や「もの」は言語表現においても焦点が当てられないし、自らの<見え>に入らない「こと」や「もの」は言語化されない。

一方、「客観的把握」とは、認知主体が「<話者>は自らと<事態>とのあいだに間^まをとり、<事態>とは隔離されているというスタンス」(池上 2011: 51) で把握する方法である。認知主体は「今・ここ」の状況にあって状況の「内」にありながらも自らを離脱させて状況の「外」に身を置き、³ 傍観者的・観察者的に事態把握する。そして、話者として、知覚像・認知像を外的事実としてメタ認知し、メタ認知された<見え>に入る「こと」や「もの」に焦点を当てて言語化する。焦点が当てられずに背景に退いた「こと」や「もの」は言語表現においても焦点が当てられないし、自らの<見え>に入らない「こと」や「もの」が言語化されないのは、「主観的把握」と同様である。

池上はこの対比を以下のように要約している。「具体的に言えば、前者は<話者>が問題の中に身を置き、<事態>を当事者的に直接<体験>するというスタンスでの把握、後者は<話者>が問題の<事態>の外に身を置き、<事態>を傍観者的に<観察>するというスタンスでの把握、である。」(池上 2011: 51)

2. 事態把握と言語化の具体例

次に、対比的なふたつの事態把握と言語化の具体例を見る。

「主観的把握」「客観的把握」それぞれのスタンスの違いが、言語化された場合どのような違いになってあらわれるか、以下の Langacker による有名な例文を取り上げて説明する。

(1) a. Vanessa is sitting across the table.

b. Vanessa is sitting across the table from me.

(Langacker 1991: 326)

(1a) の例文は、状況の「内」にあって、認知主体が〈見え〉の通りに（話者として）言語化している。それに対して、(1b) は、‘from me’ が加わっており、認知主体・話者の〈見え〉の中に自らが含まれていることを示している。認知主体・話者は状況の「外」に身を置き、状況の「内」にいる自分の姿（分身、痕跡）を見ている。状況の「内」にいる認知主体・話者自身の姿（分身、痕跡）が、一人称代名詞によって指示されているのである。

英語における典型的な使い方としては、(1a) の場合、認知主体・話者がいる「今・ここ」の状況において、認知主体・話者のテーブル越しにヴァネッサがいる状況での発話である。認知主体・話者の〈見え〉の中に自らはいないが、テーブルとヴァネッサは存在している。それに対し、(1b) は認知主体・話者が写真を見ながら語っている場合が想定される。認知主体・話者のテーブル越しにヴァネッサが座っている様子が写っている写真を認知主体・話者が見ながら語る時、当該の認知主体・話者の〈見え〉の中に、つまり写真に自らの姿が見えている（写っている）。よって、自分の存在が一人称代名詞を使って言語化されているのである。この場合、(1a) が「主観的把握」、(1b) が「客観的把握」の例である。

次に知覚に関する言語表現を例に挙げる。

(2) a. あったぞ。

b. I found it.

(本多 2005: 157)

(2a) の表現は、知覚の言語表現ではなく、人間から独立した抽象的な存在だけをあらわすのではないかと考える向きがあるかもしれない。しかし、この文は何らかの状況にあって何らかの対象を認知し、言語化する存在、つまり表層的には言語化されていない認知主体・話者の存在を前提としていられる。本多は、次のような例を挙げ、(2a) の背後に認知主体がいることを論証している。

(3) a. 動物園に行けばパンダがいるよ。

b. You will see a panda if you go to the zoo.

(本多 2005: 157)

(3) のペアは (2) のペアと同様の対比である。(3a) の場合、認知主体が動物園に行こうが行くまいがパンダは動物園に存在している。にもかかわらずこの文が自然に聞こえるのは、聞き手を認知（知覚）主体として想定していることを強く示唆するからである。つまり、(2a) と (3a) は、存在をあらわす「いる・ある」を使った表現ではあるが、その背後に対象の存在を認知する主体・話者がいることを前提としており、認知主体・話者による知覚ないし発見をあらわしているのである。⁴ この場合、(2a) と (3a) は「主体的把握」、(2b) と (3b) は「客観的把握」の例と言える。

感覚や感情に関する表現を以下に例示する。

(4) a. ずっと右肩が痛い。

b. I have a chronic pain in my right shoulder.

(5) a. 熱がある。

b. I have a (high) fever.

- (6) a. 嬉しいなあ。
b. I am glad.

(4) から (6) の例文はいずれも a が当事者的・体験的に事態を把握した「主観的把握」、b が傍観者的・観察的に事態を把握した「客観的把握」の例である。

3. 言語による好み

「事態把握」に関しては、言語によって好みの傾向があることが報告されている。認知言語学の分野でよく知られているように、また上述 (2) から (6) までの例文からうかがえる通り、日本語話者は「主観的把握」を好み、英語話者は「客観的把握」を好むと言われている。

上述の例以外にも、「ここはどこ?」「城が見える」「あ、こぼれちゃった」等の日本語表現は「主観的把握」の典型例であるし、それに対応する英語表現 ‘Where am I?’ ‘I (can) see a castle.’ ‘Oh, I spilled it.’ は「客観的把握」の典型例である。⁵

4. 一人称ーゼロ形と代名詞

ここまで述べてきたふたつのスタンスは、哲学で議論されてきた主客合一と主客対立という概念的対立とみなすこともできる。しかしながら、この類型的対立は単純な対称をなしているわけではない。

すなわち、ひとつには、この対立が二者択一の二分法をなしているわけではなく、勾配的な差、程度の差であるとみなすべきだということである。⁶

もうひとつは、言語化された表現について見れば、認知主体・話者に関し、片やゼロ形（つまり、言語化されない）で、一方は一人称代名詞等で実現されるという違いが見られるということである。この差異は何に起因するのであろうか。以下の定義を利用して考える。

Subjective construal

The speaker is located within the very same situation she is to construe and construes it as it is perceivable to her. If she is not located within the situation she is to construe, she may mentally displace herself into the situation she is to construe and construes it as it would be perceivable to her. The speaker, who construes the situation, is embedded in the very same situation she is to construe and her stance is characterizable as ‘subject-object merger’.

(Ikegami 2015: 8)

(論文執筆者訳: 主観的把握)

話者は事態把握しようとする事態の中に身を置き、知覚された通りに事態把握する。もし話者が事態把握しようとする事態の中に身を置いていないのであれば、事態把握しようとする事態から心的に自分を切り離して事態に自己投入し、あたかも事態が知覚されるように、臨場的・当事者的・体験的に事態把握する。状況を事態把握する話者は、事態把握しようとする事態の中に埋め込まれているのであり、このようなスタンスを主客合一と特徴づけられる。

Objective construal

The speaker is located outside the situation she is to construe and construes it as it is perceivable to her. If she is embedded in the very same situation she is to construe, she mentally displaces herself outside the situation she is to construe, leaving, however, her counterpart behind — in other words, the speaker undergoes a self-split here, herself stepping out of the situation but at

the same time, leaving her counterpart behind in the situation. The speaker, who construes the situation, is detached from the situation she is to construe and her stance is characterizable as 'subject-object contrast'. (Ikegami 2015: 8)

(論文執筆者訳: 客観的把握)

話者は事態把握しようとする事態の外に身を置き、そこから知覚された通りに事態把握する。もし話者が事態把握しようとする事態に埋め込まれているならば、事態把握しようとする事態から自分を切り離して事態の外に身を置き、しかしながら同時に元の自分を事態の中に置いておく。言い換えれば、話者は自己分裂を経験し、一方で自らを状況の外に置きながらも元の事態に自らの姿を残していくのである。状況を事態把握する話者は、事態把握しようとする事態から切り離されているのであり、このようなスタンスは主客対立と特徴づけられる。)

それぞれの一文目は問題ないであろう。「主観的把握」において話者がもともと事態の「内」に身を置いている場合、「客観的把握」において話者がもともと事態の「外」に身を置いている場合について述べているのであり、両者ともに事態把握する視点の位置そのままについて説明しているからである。ポイントとなるのは、それぞれの二文目である。二文目は、「主観的把握」において話者が事態の「外」に身を置いている場合、「客観的把握」において話者が事態の「内」に身を置いている場合について述べている。

「主観的把握」において話者が事態の「外」に身を置いている場合、話者は事態の「内」に身を置くような、自己投入とでも呼ぶべき認知操作を行う。それに対し「客観的把握」において話者が事態の「内」に身を置いている場合、話者は事態の「外」に身を置くような、離脱とでも呼ぶべき認知操作が必要とされる。しかし、「客観的把握」におけるこの離脱は、先の自己投入と逆方向の認知操作ではない。自己投入の場合、認知主体・話者が事態の「内」に身を置いても、元の位置(事態の「外」)に認知主体・話者の姿を残すわけではない。⁷ それに対し、離脱の場合、認知主体・話者が事態の「内」から「外」へと身を置くと、事態の「内」の元の位置に認知主体・話者の姿(分身、痕跡)が残るのである。この点を示すために、単なる離脱と呼ぶよりはむしろ、三浦の用語を使えば、自己分裂と呼ぶ方が適切であろう。

このような非対称性により、「主観的把握」と「客観的把握」では、一人称を言語化するかどうかで大きな違いが生まれることになる。「主観的把握」における言語使用の特徴は、先に触れたように、一人称表現のゼロ形の使用である。つまり言語表現の形としては実現されない。「主観的把握」にあって人が周囲を知覚する通常の場合、知覚された世界の中に認知主体・話者は含まれないので、認知主体・話者たる一人称は言語化されないのである。それに対して、「客観的把握」においては、事態の「内」にいた認知主体・話者が「外」へと離脱する際に自己分裂という認知操作を経て事態の「内」に元の自分の姿(分身、痕跡)を残すので、事態の「外」にいる認知主体・話者はこの分身を認知することになる。〈見え〉の中に自己の姿が見えているため一人称が言語化されるのである。

上述の例文(2),(4),(5),(6)を振り返ると、このような一人称の違いが際立っている。それぞれのaにおける日本語の文では一人称はゼロ形として、bにおける英語の文では一人称代名詞として言語化されている。

この現象に関連して興味深い例を次に示す。

(7) a. 誰もいません。

b. Nobody is here except me.

(Ikegami 2015: 10)

これらの文は、たとえば、誰かがある部屋の中に誰かがいるかどうか携帯電話で報告するような場合に使われる。⁸ 認知主体・話者は〈見え〉の中に人が存在するかどうかに基づいて回答することになる。「主観的把握」をする日本語話者の〈見え〉に人の姿はないのに対し、「客観的把握」をする英語話者の〈見え〉には自らの姿がある。⁹

以下、一人称に関するこのような違いを基に、日本語と英語の感情・感覚表現を考察する。

5. 一人称権威

感情・感覚については、私的（私秘的）であり、私が私について知る特別な優位性があるという素朴かつ自然な考え方がある。公共的な何か、たとえば目の前にあるコップについてであれば、誰であれ仔細に調べようと思えば調べることができ、詳しく知ることができる。そのコップを私が毎日使っているのだとすれば、私は誰よりもそのコップをよく知っているかもしれないけれど、それは偶然的な優位性に過ぎない。それに対し、感情・感覚に関しては、必然的な優位性があるように思われる。感情・感覚は私的な領域に属している。私の感情・感覚については他の誰よりも私が一番よく知っており、それは内観を通してアクセスされる。私の感情・感覚を直接経験できるのは私のみ、他者は私の感情・感覚に直接アクセスすることができない。また、他者の私的な領域を私が直接経験することもできない。このような、私が持つ特権性を哲学においては一人称権威と呼んでいる。

一人称権威は、哲学的には深い議論がなされているが、素朴な常識に従う限り、妥当な考え方であるように思われる。感情の表現に関して言えば、日本語の場合、一人称と三人称の間に非対称性が見受けられ、日本語（国語）学において人称制限と呼ばれて研究されてきた。

(8) a. 私は悲しい。

b. *彼は悲しい。

感情をあらわす形容詞（うれしい、悲しい等）を言い切りの形で使う時、一人称主語の文は自然であるが、三人称主語の文は極めて生硬である。(8b) の文は以下の (8c) のような表現を用いれば自然な日本語となる。

c. 彼は悲しそうだ／悲しがっている。

感覚に関する表現に関しても同様のことが言える（また、欲求に関する表現も同様であるので付記しておく）。

(9) a. 私は痛い。

b. *彼は痛い。

c. 彼は痛そうだ／痛がっている。

(10) a. 私はコーヒーを飲みたい。

b. *彼はコーヒーを飲みたい。

c. 彼はコーヒーを飲みたそうだ／飲みたがっている。

ところが、以下の例に見る通り、妥当だと思われる一人称権威、人称制限が英語においては見られない。

- (11) a. I am sad.
b. He is sad.
- (12) a. I have a chronic pain in my right shoulder.
b. He has a chronic pain in his right shoulder.
- (13) a. I have a (high) fever.
b. He has a (high) fever.

以下、本稿では感情・感覚表現に関する日本語と英語の違い、特に人称制限に関する違いについて、事態把握、さらには視座と眺めという概念を援用して考察する。

6. 日本語と英語それぞれの感情・感覚表現一事態把握

すでに見た通り、日本語話者は「主観的把握」を好む傾向があるわけだが、感情・感覚表現に関して人称制限があることに鑑みれば、一人称と三人称で異なるスタンスを使っているように思われる。一人称に関しては当事者的な「主体的把握」を行うが、三人称に関しては直接経験できないが故に観察者的な「客観的把握」を行うように、一見思われる。

これは一人称と三人称との非対称性に関する以下のような、素朴かつ自然な考え方に基づいている。私の感情・感覚には私だけしかアクセスすることができない。私は私の〈見え〉の中に感情・感覚を捉えることができるから、私の感情・感覚については「内」から捉えて言語化できる。それに対して、私は他者の感情・感覚そのものを私の〈見え〉の中に捉えることができないから、そのものを言語化することはできない。言語化できるのはせいぜい〈見え〉の中に含まれる他者の外面的な振舞いだけである。それ故に、一人称に関しては当事者的な「主観的把握」が可能だけれども、三人称に関しては観察者的な「客観的把握」を行うのである。

しかし、三人称に関して本当に「客観的把握」を行っているのだろうか。

「客観的把握」は事態の「外」に身を置いて、そこからの〈見え〉を語るスタンスであると述べた。その〈見え〉において、一人称と三人称の間に違いはない。とすれば、人称による表現の違いはないはずである。つまり、「嬉しい／嬉しそうだ、嬉しがっている」や「痛い／痛そうだ、痛がっている」というような、人称と共起する語の違いは起こりえないはずである。英語を見れば、このことは一目瞭然だ。日本語の三人称が「客観的把握」であるとすれば、三人称に使う「嬉しそうだ、嬉しがっている」は、一人称に対しても使えるはずである。¹⁰

- (14) ?私は嬉しそうだ／嬉しがっている。

- (15) ?私は痛そうだ／痛がっている。

(14)、(15) は通常の言語使用とみなせば明らかに不自然な日本語である。「客観的把握」が使われる〈語り〉の場面を除けば、これらの文の使用が認容される文脈を想像することすら難しい。ということは、(8)、(9)、(10) における三人称主語の文は「客観的把握」とみなすことはできないのでは

ないか。

私は、(8)、(9)、(10)における日本語の三人称主語の文は「主観的把握」だと考えるし、(11)、(12)、(13)の英語の三人称主語の文は「客観的把握」だと考える。「～そうだ／～がっている」という表現を付加するのは、「客観的把握」だからではなく、日本語の感情・感覚表現が「内」的側面に焦点を当てる表現であるからである。感情・感覚をあらわす表現の意味が日本語と英語で異なっているのである。

どのような感情を抱いている時に外面的にどのような振舞いをするか、どのような感覚を持っている時に外面的にどのような振舞いをするか、感情・感覚とそれら特有の振舞いの間に相関関係があることは経験的に知られている。感情・感覚とそれに伴う特有の振舞いの間には、文化相対的ではあろうが、かなりの程度の相関関係がある。であれば、感情・感覚を言語化する時、感情・感覚そのものに注目して心理的な把握・身体「内」からの把握に焦点を当てる場合と、感情の外面的な振舞いという側面に注目して「外」からの把握に焦点を当てる場合の両方があることが予想できる。感情・感覚をあらわす日本語表現は、心理的な側面・身体「内」の側面に焦点が当たっており、英語表現は、感情・感覚に加えてその外面的な振舞いにも焦点が当たっている。

このような日本語と英語の違いに関し、別の例を使ってではあるが、池上が次のように説明している。

同じような対立が、英語の形容詞と通常それに対応する訳語として使われる日本語の形容詞との間に認められることもある。例えば、英語の *kind* は ‘saying or doing things that show that you care about other people and want to help them or make them happy’ (LDOCE⁴) といった定義からも読み取れる通り、外に現れる振舞いに焦点が当てられるのに対し、日本語の「親切」は「人情が厚いこと。思いやりがあり、行き届いて丁寧なこと。」(『角川新国語辞典』) という定義にも見られる通り、明らかに内面的な気持ちの方に重点が置かれている。‘Be kind!’ というように *be* に伴って、命令形として使えるということ、名詞形の *kindness* は ‘many kindnesses’ のようにいくつもの親切な振舞い> という意味でごく普通に複数形になるといったことも、その辺の事情を反映している。また、LDOCE³ には *kind* と形容詞の *kindly* について、次のような注記のあることも参照: ‘The adjective **kindly** describes a person’s general character. **Kind** may also do this, but often describes someone’s behavior at one particular moment.’ *Polite, rude, shy, idle* などといった形容詞の場合も、日本語話者は英語話者と較べて、外面的な<振舞い>よりも内面的な<気持ち>の方へ強くひきつけて理解しているように思える (*polite* が *be being polite* と進行形とごく自然に使えることも参照するとよい)。

(池上 2011: 62 強調等は原文のまま。LDOCE³ は LDOCE 3rd edition, LDOCE⁴ は LDOCE 4th edition を表す。)

日本語と英語それぞれの感情・感覚表現について、たとえば、「悲しい」を調べてみる。「悲しい」は『新明解国語辞典』によると第一義的な意味は「〔不幸に会った時など〕取り返しのつかない事どもを思い続けて・泣きたくなる気持(絶望的な感じ)だ」とある。それに対し、英語の *sad* は LDOCE によれば ‘feeling, showing, or causing grief or sorrow」が第一義となっており、OALD によっても ‘showing or causing sorrow」となっている。『ロングマン英和辞典』によれば「<人・表情・声などが>悲しい、悲しげな」が第一義となっている。日本語の「悲しい」は純粋に「気持ち」の問題であるが、一方、英語の *sad* には観察可能な部分の意味が含まれていることがわかる。

「痛い」は『新明解国語辞典』によると第一義的な意味は「打たれたり切られたり体内に故障があったりして、(がまん出来ないほど) 苦しい」とある。それに対し、英語の pain は *LDOCE* によれば「suffering; great discomfort of the body or mind」が第一義となっており、*OALD* によれば「(a) physical suffering or discomfort caused by injury or disease」「(b) feeling of suffering or discomfort in a particular part of the body」「(c) mental suffering or distress」が第一義となっている。感情表現ほど差がはっきりしないかもしれないが、それでも、日本語の場合、定義において「体内」という「内」を示す語が使われているのに対し、*LDOCE*、*OALD* ではいずれにおいても身体の「内」と「外」を区別していない。また、例文を見ると、*LDOCE* では「He was in great pain/crying with pain after he broke his arm.」が、*OALD* では「Her back causes/give her a lot of pain.」「Her harsh words caused her much pain.」が第一義において使われており、いずれも三人称が主語となっている。英語において、痛みに関する典型的な例文は一人称主語よりもむしろ三人称主語なのである。

感情・感覚を言語化する場合、やはり<見え>の中にあるものが言語化される。感情・感覚の表現に関し、日本語話者は、当事者というよりもむしろ事態に臨場して「主観的把握」を行っている。日本語話者が「主観的把握」をして、「内」側から捉えられる側面に焦点の当たった表現を使って感情・感覚を言語化する場合、一人称に関しては問題とならないであろう。¹¹ それに対して、三人称の場合は、感情・感覚表現が「内」面に即しているが故に、他者の感情・感覚を一人称と同じ語であらわすことが難しくなる。そのために日本語話者は、たとえば「悲しい」という述語形容詞を他者に帰することができず、「悲しそうだ／悲しがっている」といった、感情に外面的な振舞いや様子をあらわす表現を付加せざるを得ないのである。人称制限はこのような事情から生じるのではないか。

一方で英語話者は観察者的に「客観的把握」を行っている。感情・感覚表現が「内」面ばかりかその「外」面的な振舞いまで意味に含んでいるから、人称制限が起これないと考えられる。

7. 視座と眺め

さらに突き詰めて考察すべき点がある。英語において人称制限が起これないのは、上述のように、英語の感情・感覚表現が内面的なものだけでなく外面的な振舞いに焦点を当てているからという理由であると思われるが、これは一人称権威を行動主義的に否定していることを意味するのか、という問題である。これについて考えるために、最後に以下のふたつの問題を考察する。ひとつは、英語において、感情・感覚を「内」側から捉える、つまり内観を通じて捉えることはないのか、という問題。もうひとつは、「客観的把握」自体が、感情・感覚表現の意味とは外面的な振舞いのことなのだと考える行動主義的発想なのか、という問題である。

ひとつめの問題に対しては、「ある」と考える。英語において ‘I have a sharp pain in my shoulder.’ という文を他者が否定することは難しい。たとえ外面的な振舞いが伴っていなかったとしても、痛み特有の徴候が見られなかったとしても、話者は ‘I have a pain.’ と主張することができる。それに対し、‘He has a sharp pain in his shoulder.’ という文は、他者が否定することができる。私が ‘He has a sharp pain in his shoulder.’ と言ったとしても、他者が ‘Oh no, he doesn’t have a pain.’ と打ち消すことができるのである。また、‘I know I have a sharp pain in my shoulder.’ という文は通常の範囲で言えばおかしい。否定文である ‘I don’t know I have a

pain.’ が成立しないからである。痛みを感じている限り、痛みはあるのであり、痛みがないということは「痛みがあるのに知らない」ということではなく、単に痛みがないに過ぎないのである。私の痛みは「知る」「知らない」とつながっていない。しかし、‘I know he has a sharp pain in his shoulder.’ は自然である。‘I don’t know he has a pain.’ が成立するからである。さらに言えば、一人称の場合、通常、自分が痛みを感じていることについて間違えることはない。一方、三人称の場合、他者が痛みを感じていることについて間違えることはあり得る。

このように、英語の場合でも一人称と三人称には非対称性が見られ、一人称においてより確実性が保証されているように見える。故に、一人称を使った文では、感情・感覚を「内」から捉えた意味を含んでいると考えてよいのではないか。つまり、英語の場合、一人称の感情・感覚表現は「内」からの把握と「外」からの把握が二重になっているのである。

ふたつめの問題に関しては、以下、野矢の議論に沿って考える。¹² 英語についての考察であるが、ここではまず日本語を使い、感情・感覚について知覚と対比させて考える。

「今・ここ」にコップがあるとする。コップは私の〈見え〉の中に入っている。この場合、私は「主観的把握」をして「コップが見える」と言う。今、私のいる位置からはこの様にコップが見えるが、別の位置に移動すれば、別様に見えるだろう。右に 90 度視覚を移動させれば、コップの〈見え〉が変わる。上から見たり、下から見たりすれば、また違った姿でコップが見える。このような例において、私の見る位置を視座、私が見る風景（コップが見えている風景）を眺めと呼ぶことにする。

視座と眺めは対応する。A と B が物理的に異なる位置であれば、私が A という視座から見る眺めは、私が B という視座から見る眺めとは異なるであろう。

今、私が書いたこの書き方に、一人称権威が入り込む隙間が隠れているように思われる。今、ここから見えているコップの眺め、A という視座から私が見ているこの眺めは、「私の眺め」である。B という視座に移動しても、見る人が私である限り、B という視座から私が見るこの眺めは「私の眺め」である。他者が見る眺めを私が見ることは決してないだろう。なぜなら、他者が A という視座から見る眺めを私は知り得ず、A という視座から私が見ればそれはやはり「私の眺め」になってしまうからである。「私の眺め」は私しか見ることができないし、私は「他者の眺め」を見ることが決してない。「私の眺め」と「他者の眺め」は隔絶されており、私は「他者の眺め」には接近できない。その代わり、私は「私の眺め」を特権的に享受できる。このような考え方こそが、デカルト以降、他者問題の根幹をなしているように思われる。

ここで私は、野矢に倣って、視座と眺めの関係は、非人称的であり、ここかあそこかの違い、A から見るか、B から見るかの違いしかない、と考えたいと思う。¹³ A という視座から私が見るこの眺めは、「私の眺め」なのではなく、「A という視座からの眺め」に過ぎない。B という視座から私が見るこの眺めもまた「B という視座からの眺め」に過ぎない。視座と眺め、この対応に「私」や「他者」を潜入させる必要はないし、させてはならない。A という視座から見る眺めは、誰にとっても開かれ得る。A という視座から「私」が見ようが「他者」が見ようが、「A という視座からの眺め」が開ける、これが大原則だと考える。¹⁴

この議論を、知覚だけでなく、感情・感覚に広げることができるだろう。ある感情を持った人がいるとする。その感情は私的（私秘的）で「他者」からアクセスできないのではない。その感情の眺めが開かれる視座に立てば、原則的に誰でもその感情を感じることができるのである。感覚も同様であ

る。ある痛みを感じる人がいたとする。その痛みの眺めが開かれる視座に立てば、誰もがその痛みを感じるできるのである。¹⁵

ただし、知覚の場合と感情・感覚の場合、ふたつの大きな違いがある。¹⁶ まず、知覚の場合、知覚するものは対象であるが、感情・感覚の場合、対象ではないということだ。知覚対象は、知覚されない時も存在している。対象とは、そのような存在のことを言う。しかし、感情や感覚は、感じない時も存在しているということができない。よって対象ではないと考えるべきである。

次に、知覚は、ある対象を捉える視座が無数にある。視座が無数にある中で、現実的にひとつの視座を占め、それに対応する眺望を得る。実際には、ある特定の視座にしか立たないが、それ以外の視座に立つことも可能だと知っている。つまり、ひとつの対象を知覚する際には、あるひとつの視座から眺めを得ているが、別の視座から別の眺めが開かれることも知っているのである。「よく見なさい」という場合、ある視座からじっと見るだけでなく、それ以外の視座からも見て様々な眺めを開き、その眺めを総合することが期待される。「よく見る」ことができるということは、視座が複数あることに他ならない。それに対し、感情と感覚は、それを捉える視座がひとつしかないのである。実際、対象に近づいたり、触ったり、裏返したりするように感情や感覚を扱うことはできない。「よく感じなさい」「よく痛みなさい」という表現は意味をなさないだろう。つまり、感情や感覚を捉える視座はひとつなのである。

結論を述べるならば、感情・感覚は私秘的な対象ではない。ある感情・感覚を得る場合、その感情・感覚が眺めとして開かれる視座に立てば、原則的に、私も他者も、誰でもその感情・感覚を得ることができる。私の感情・感覚は決して「私の眺め」ではないし、他者の感情・感覚は決して「他者の眺め」ではない。つまり、私の嬉しさや痛みは、「私の」ものではなく、この視座に立てば開かれる眺めに過ぎないのである。故に、他者の感情・感覚は、原則的に、わかる可能性があるものなのである。

英語話者が感情・感覚にも「客観的把握」を行うのは、行動主義的な発想と結びついているのではなく、以上のような考え方と結びついているのである。

付け加えれば、感情・感覚の場合、そこに通じる視座がひとつしかないことから一人称権威という発想が起り得る。日本語では、視座がひとつしかない点に焦点が当たり、人称制限が起っているのだと考えられる。

8. 終わりに

日本語と英語の感情・感覚表現に関し、事態把握と関連づけて、その後で視座と眺めという概念を援用して人称制限について考えてきた。本稿では触れていないが、これまで私が考えてきたアスペクト報告も、本稿の考察に発展的につながっている。ここから先の考察については稿を改めて論じる。

注

- 1 「状況」と「事態」に関し、本稿ではほぼ同意を示す用語とみなし、交換可能な用語として使用する。ただし、construal の訳語である「事態把握」という専門用語は認知言語学において定着しているので、「状況把握」という用語は使用しない。
- 2 中村（2004, 2009）参照。
- 3 「身を置き」と記したが、実際に身体を状況の「外」に出すというよりは、認知主体の視座を状況の「外」

に置く，という意味である。

- 4 どこから見るかという視座が特に問われない場合，知覚表現でなく存在表現が好まれるのではないかと私は考える。
- 5 ここまで述べてきた対立に関する哲学的論点を数多く挙げるができる。たとえば，独我論，超越論的主体，反省的意識，場としての主観を巡る議論は本論とも大きく関係するであろう。また，哲学とは無関係であるが，世阿弥のいう我見，離見，離見の見といった概念も本論とつながっていると考えられる。これらの点に関しては別の機会に考察する。
- 6 池上（2011: 51）参照。
- 7 もっとも，事態の「外」は認知・言語化の対象とならない領域（＜見え＞の外部）であるから，認知主体・話者の姿が残ったとしても言語化はされない。
- 8 場面解釈は池上による。池上（2015: 10）参照。
- 9 英語でも‘Nobody is here.’と言う場合があるが，その場合，英語話者も「主観的把握」を行っていることになる。本文でも述べた通り，この対立は二分法ではなく程度差と考えるべきであり，好みの違いも傾向性と理解しておくべきである。英語話者がまったく「主観的把握」を行わないわけではないし，日本語話者が「客観的把握」を行わないわけでもない。
- 10 「客観的把握」であれば，もちろん一人称代名詞を伴うことになる。
- 11 (8a) の文は本来なら「私は」という表現が不要であり，ないほうが自然である。(8b) と対比するために「私は」という主語を入れたが，このような主語が入ることによって文全体の意味が変化してしまう。「他人はどうか知らないが私は」というような，対比・限定の意味合いを帯びてしまうのである。通常はゼロ形で実現されるのが適切であろう。
- 12 視座と眺めを非人称的とみなす考察は野矢に負っている。野矢（1999）参照。なお，野矢と用語は異なる。
- 13 知覚の公共性，観察点の公共性といった議論は他にも見られる。ギブソン（1985）参照。
- 14 視力等，見る人の身体的能力に関してはここでは問わない。あくまでも原則的な話である。
- 15 ある人が「嬉しい」と感じる場所で別の人が「悲しい」と感じるのか，ある人が「痛い」と感じる場所で別の人が痛みを感じないとか，そのような話をしているのではない。ある人が「嬉しい」「痛い」と感じる時，その視座とそこから開かれる眺めは非人称的であることが原則だ，ということを伝えようとしているのである。
- 16 このふたつの違いに関する考察は野矢に負っている。野矢（1999）参照。

参考文献

- Ikegami, Yoshihiko. ‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’: A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation. *Journal of Cognitive Linguistics, Volume I*. The Japanese Cognitive Linguistics Association. pp. 1-21. 2015.
- Langacker, Ronald W. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*. Stanford University Press. 1991
- 池上嘉彦 「日本語と主観性・主体性」 澤田治美編 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』 ひつじ書房 2011 年 pp. 49-67
- 入不二基義 『ウィトゲンシュタイン 「私」は消去できるか』 NHK 出版 2006 年
- ギブソン, J. J. 『生態学的視覚論 ヒトの知覚世界を探索』 古崎敬他訳 サイエンス社 1985 年
- 澤田治美編 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』 ひつじ書房 2011 年
- 坪本篤朗他編 『「内」と「外」の言語学』 開拓社 2009 年
- 中村芳久「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」 中村芳久編 『認知文法論Ⅱ』 大修館書店 2004 年

pp. 3-51

中村芳久 「認知モードの射程」 坪本篤朗他編 『「内」と「外」の言語学』 開拓社 2009年 pp. 353-393

野矢茂樹 『哲学・航海日誌』 春秋社 1999年

本多啓 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』 東京大学出版会 2005年

本多啓 「他者理解における「内」と「外」」 坪本篤朗他編 『「内」と「外」の言語学』 開拓社 2009年 pp. 395-423

本多啓 「共同注意と間主観性」 澤田治美編 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』 ひつじ書房 2011年 pp. 127-147

三浦つとむ 『認識と言語の理論 第一部』 勁草書房 1967年

三浦つとむ 『認識と言語の理論 第二部』 勁草書房 1967年

三浦つとむ 『認識と言語の理論 第三部』 勁草書房 1972年

【辞書類】

Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE) Longman 1st edition=1978, New edition=1987, 3rd edition=1995, 4th edition=2003

Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD) Oxford University Press 4th edition=1989

『新明解国語辞典 第四版』 三省堂 1996年

『ロングマン英和辞典 初版』 桐原書店 2006年

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)